**「シャンカラーチャーリヤの賛歌　バジャ・ゴーヴィンダム」　第 2** **部**

2021年9月19日

逗子例会

スワーミー・メーダサーナンダによる講話

於・逗子本館よりライブストリーミング

［2021年7月の例会から、シュリー・シャンカラーチャーリヤの有名な賛歌「バジャ・ゴーヴィンダム」の講話が再開されました。今回はその第2回目です］

バジャ・ゴーヴィンダムの最初の三つの詩節についてはすでにお話ししたので、今日は第4節から始めましょう。

*ナリニイダラガタ*

*ジャラマティララム*

*タドヴァッジヴィタマティシャヤチャパラム*

*ヴィッディ　ヴャーダビマーナグラスタム*

*ローカム　ショカハタム　チャ　サマスタム*

*蓮の葉の上の雨粒のように、人の人生は不確かだ；*

*全世界は、病気、エゴ、悲しみの餌食になっている。*

［ここで、スワーミー・メーダサーナンダ（マハーラージ）は、参加者がよく理解できるように、庭で摘んだ蓮の葉にひと匙の水を垂らして、雨粒がどのようになるかをお見せになった］

シャンカラーチャーリヤは、皆さんが今見た例えを用いました。蓮の葉以外の葉では、これほど顕著に効果はあらわれません。

**この世で一番不思議なこと**

人生が不確かであるとは、蓮の葉の上の雨粒のように今にも落ちそうで不安定である、という意味です。また、私たちは病気、エゴ、悲しみの餌食である、と言ってます。これには二つのアイデアが示されています。一つ目は、人生は不確かである、ということ。二つ目は、人生は順風ではないということです。生きている限り、人生は病気、悲しみ、エゴの対象となり、すごく幸せに生きる、ということはできません。マハーバーラタ叙事詩に有名な話があります。ユディシュティラはパーンダヴァ兄弟の長兄で、とても高潔で霊的で智慧のある人でした。ある時ユディシュティラは、最も不思議なことは何ですか、という質問を受けました。ここで、ユディシュティラの答えの前に、別の物語の同じ質問をみてみましょう。ある骨董屋が一人の客から、この店で最も不思議なものは何ですか、と聞かれました。店主は自分自身を指さして、私がこの店で最も不思議なものです、と言いました。これも一つの答えです。私たちはそれぞれ生まれながらに不思議です。もし私たちが、意識の心、無意識の心、超意識の心を考えるなら、それぞれの人は独特です。だから私たちはユディシュティラの答えを知る前には、このように答えるかもしれませんね。しかし、この質問にはもっと大事な回答があります。ユディシュティラは答えます。

*アハニー　アハニ　ブーターニ　ガッチャンティ　ヤママンディラム*

*シェシャハ　スタヴァラム　イッチャンティ　キム　アシュチャリャム　アタハ　パラム*

*一瞬間ごとに多くの人々が死の王の住処へと旅立っている。*

*しかし残された人たちは、自分は死なない、と思っている。これがこの世で最も不思議なことだ。*

これは、このように言いかえることもできます。自分はいずれ死ぬ、ということは、誰もが知っている。死を目撃し、自分もいつか死ぬ、ということを理解している。しかし、こう思う、「私はいずれ死ぬ、でも今じゃない！」　と。だれも自分が永遠に生きるとは思っていないし、死にたくはないがいつかは死ななければならない、ということは分かっています。しかし、どうして死を恐れないのでしょうか？　緊張しないのでしょうか？　なぜなら、彼らは「そうだ、私だっていつかは死ぬ。でも今じゃないのだから、人生を続けよう」と思っているからです。　しかし、死が訪れるのがいつか知っている人などいるでしょうか？　今日？　この瞬間？　それは誰も分かりません。

**自然災害、伝染病、病気**

自然災害や戦争で瞬時に亡くなる人がいます。1923年の関東大震災や、また第二次世界大戦中に日本では東京大空襲や長崎・広島の原爆で多くの人が亡くなり、世界を見渡せば何百万人もの人々が亡くなったことを考えてください。最近では2011年の東北地震と津波があげられます。どの出来事も、ほんの数分でいったいどれほど多くの人が亡くなったでしょう？　もちろん世界大戦がいつも起きるわけではありません。しかし、地震や津波、火山噴火などの自然災害はランダムに起こるので、いつ起きるか誰にも分かりません。誰も知らないのです。いつでも、どんな瞬間も、どこでも、そのような出来事が起これば、私たちの人生は消えてしまいます。2021年6月18日現在、コロナ・ウイルスの蔓延は400万人を超える命を奪いました。これは膨大な数ですが、それは人類史上初の広範な感染流行ではありません。これまで、ペスト、チフス、ハンセン病、インフルエンザ、天然痘、マラリアなどの感染流行があり、多くの村や市が荒廃し、非常に多くの人々が短期間で亡くなりました。癌は別の一般的な病気ですが、誰がいつ癌に苦しむことになるのかを知る人はいません。

私は旧知の外国人が入院した際にお見舞いに行ったときのことを思い出します。彼は当時50代で、アーティストであり素晴らしい歌手でした。彼はこれまでとても幸せに暮らしていた、と言いました。彼は数種類の検査を受けて癌であることが分かったのです。私が病院に見舞ったとき彼は言いました「スワーミージー、私はこれまでとても幸せな生活を送っていました。それが突然、全てが変わったのです。世界が完全に変わりました」。　このように、癌は静かに、警告なしにやってきます。誰もそれに気づかない。蓮の葉の上の雨粒のように。それなのに、私たちは「私はいつか死ぬが、でも今ではない」と思っているのです。　肝心ことは、今ではないと言っているのは誰か、今ではないと確証できる人などいない、ということです。今にも死ぬかもしれないとしたら、それに直面する準備はできていますか？　勇気や智慧をもって、死に立ち向かえるでしょうか。　答えは、イエスですか、ノーですか？　自分がもうすぐ死ぬことを知らされる人々がいます。死ぬまでに長い猶予がある場合（がん転移がない等）と短い猶予しかない場合があります。

**パーリクシット王、呪われる**

バーガヴァタムの中に、パーリクシット王の物語があります。パーリクシット王は偉大な王でしたが、ある聖者の息子に呪われました。パーリクシット王は、パーンダヴァ兄弟の三男アルジュナの孫でアビマンユの息子であり、智慧に満ちていました。ある時、パーリクシット王は数名で森に狩猟に出かけました。森の中をさまよい歩き、とても喉が渇いたので水を探していると、聖者が瞑想しているところに遭遇しました。当時、家族と共に森で暮らしながら霊的実践をしている聖者に出会うことは、よくあることでした。パーリクシット王はその聖者に水を求めましたが、聖者は瞑想に深く没入していたので、パーリクシット王の願いが聞こえませんでした。二度三度、パーリクシット王は丁寧に尊敬を込めて願いを繰り返しましたが、返事はありません。

　それでパーリクシット王は非常に腹を立てました。腹が立ったらどのようになるか、皆さん知っていますね。礼儀を忘れてしまいます。激怒したパーリクシット王はヘビの死体を聖者の首にネックレスのようにかけました。それでも聖者はこのことに気づきませんでした。聖者には息子がいたのですが、その子は他の子どもたちと近くで遊んでいました。ある人がその息子に、王様がやってきて君のお父さんに水が欲しいといったのだが、お父さんは瞑想をしていたので何度いわれても返事をしなかった。怒った王様はヘビの死体をお父さんの首にかけた、と聖者の身に起こったことを伝えました。その子はとても有名な聖者の息子でしたので、霊的苦行を実践しており、霊力がありました。息子はお父さんのもとへ駆け寄り、ヘビの死体が首に巻かれているのを見ました。父への侮辱を見た息子は激怒し、「この侮辱を犯した者は、一週間以内にヘビに噛まれて死んでしまえ」と宣言しました。そのような人物が呪った言葉は実現します。

**智慧と勇気をもって死に直面する**

聖者がこのことを知ると深く悲しみ、そして息子を叱りました。「おまえは何をやってしまったのだ？　パーリクシット王は素晴らしい王だったのだよ。私たちのような聖者を保護し、求めれば援助もしてくださる。王は水が欲しかったのに私が答えなかったので怒っただけなのだ。それなのにどうしてお前は王を呪ってしまったのです？」　そうは言っても、呪いの言葉はすでに発せられており、その呪いを撤回するすべはありませんでした。

しかし、呪いのことを聞いたパーリクシット王は、聖者の首にヘビの死体を巻いたことは間違いだったと気づき、「この呪いは当然の報いだ」と言いました。直ちにパーリクシット王は王位を放棄し、息子を後継ぎにしました。パーリクシット王は残された時を霊的実践に捧げるために、ガンジス川のほとりに行きました。この物語は、ヒンドゥ教の最も名高い聖典バーガヴァタムの冒頭で語られている話です。パーリクシット王は聖者の首にヘビの死体をかけてから七日後に、ヘビに噛まれて死ぬことを知っています。つまり、パーリクシット王は死の準備のために七日間の猶予が与えられたのです。

パーリクシット王は聖者たちがガンジス川のほとりに彼を訪ねてくるよう招待したので、多くの聖者がやってきました。王はその聖者たちに、どうか私の残された日々に神様のことをお話しください、と言いました。王は、私は王国の全てのこともこれまでの仕事の結果も永遠ではない、ということが分かったので、もっともっと永遠のこと、神様のこと、ブラフマンのことを知りたいのです、と言いました。多くの聖者が神について講義し、話をし、議論しました。ある時、当時のインドで最も偉大な聖者であったパラマハンサ・シュカデーヴァは自由な鳥のようにさ迷い歩いていたのですが、たまたまその場を訪れました。パーリクシット王を含め、皆、偉大なシュカが来られたことが分かると敬意を表して立ち上がり、深い尊敬の気持ちをもってシュカデーヴァを迎えました。パーリクシット王がシュカデーヴァに話をしてくださいとお願いすると、シュカデーヴァはシュリー・クリシュナの話を始めました。これこそが、死を近くに感じたものがとる霊的方法です。つまり、智慧と勇気をもって死に直面するのです。

**無敵タイタニック**

タイタニック号の悲劇で死を前にした人びとが取った態度についてお話しします。当時、イギリス人は「太陽は決して大英帝国には沈まない」と豪語していました。イギリスはかつて、力と富をとても誇っていましたが、それはインドなど世界中の植民地からの搾取で得たものでした。イギリスの海運会社ホワイトスターラインの巨大で近代的な旅客船タイタニック号も自慢の一つでした。ホワイトスターライン社は、この新しい船は決して沈まない、なぜなら技術的に非常に高度で、力強く、とてもよく作られているから、と宣伝しました。処女航海が大々的に宣伝されました。タイタニック号のニューヨーク行きの大航海は安全だとして、乗船代金はとても高く設定されました。一週間の航海中、エンターテインメントや豪華な食事が入念に手配され、これまでにないほど快適で豪華な旅が約束されていたので、金持ちたちは高い船賃など気にしませんでした。イギリスのサウスハンプトンを出港してから4日後のことです、ブリッジにいた一等航海士は舵輪に衝撃を感じました。何か大きなものに当たったようですが、誰も何も見なかったし、その徴候さえありませんでした。船長は最終的に、タイタニック号は全速力で巨大な氷山の水没部分にぶつかったのだと理解しました。厚い鋼鉄製の船体に大きな穴が開き、海水が船に入りだしました。船長は刻々と変化するタイタニック号の状況を乗客に説明しましたが、最終的にはこの船はもうすぐ沈むだろうということが分かりました。船長はその後、船の救命ボートを下げ、最初に女性と子供を優先するように指示しました。多くの乗客は、この混乱の中で自分は救命ボートには乗れないだろうから、全く生存のチャンスがないことを理解しました。絶望的な船に残った多くの乗客は、「どうせ死ぬのなら、音楽や喜びや楽しみのうちで死にたい」と、歌とダンスで最後の瞬間を楽しむことに決めたという報告があります。

**快楽主義の終焉**

さて、私たちは、パーリクシット王が死に直面したとき、全てを放棄して、ただ神のことだけを考えたかった、ということを知っています。それに比べ、沈みゆくタイタニック号の多くの乗客が証明するように、多数の人々は死に直面すると、それが数時間先、数分先であっても、お祭り騒ぎで最期を迎えることを選びます。そんな人たちの理想は、できるだけ長くできるだけ多く人生を楽しむことです。カタ・ウパニシャドは言います。そのような人びとは畑の作物のようだと。彼らは解脱を求めることなく、解脱を得ることなく、長い期間、生と死の繰り返しのサイクルにどっぷりつかっています。

シュリー・シャンカラーチャーリヤは死に直面している人達に、バジャ・ゴーヴィンダムを勧めます。これらは、死に直面している人の全く異なる二つの理想の姿です。さらにシャンカラは、生まれた者は誰もが苦しみの対象であり、その苦しみの原因は、エゴ、病気、悲しみである、と言います。喜びもありますが、エゴ、病気、悲しみが原因の苦しみは何度も何度も繰り返されます。これは、喜びや楽しみの中で人生を過ごしたい人びとの運命です。これを快楽主義的な生き方と言います。

**神は万人に知らせてくださる**

しかし、私たちの多くはもうすぐ死ぬ、という知らせを受け取ります。そうです、神は、最後の旅立ちの準備するときを皆に知らせてくださるのです。　どのように？　視力、聴力、肉体的な力がゆっくりと損なわれ、肌にはしわができ、髪は白髪になります。これも「準備せよ」「準備せよ」という警告を私たちに気づかせる奥深い方法です。歯医者に通い、眼科医で眼鏡を新調すれば、しばらくの間は全て順調だと感じるかもしれません。私たちはタイヤを交換し続けるのです。私たちはオイル漏れや壊れた部品を一つ一つ交換しますが、エンジンがいつか突然停止するとは考えない、つまり私たちの人生の旅は突然終わる、とは考えません。最終的には、タイヤを交換しても動かなくなります。現代医学は来たる死から私たちを救うことはできないのですから。ですから、私たちは皆、運命に直面する、すなわち死という運命に直面しなければならないということを心に留めておくべきです。死への準備をしようではありませんか。

**死のイメージ**

死が心に与える影響とはどのようなものでしょうか？　一般的に死のイメージは、とても痛い、怖い、です。どうして死をそんなに痛いものだと思うのでしょうか？　深刻で痛みを伴う病気にかかれば、死ぬまでずっと痛い、というイメージにおびえます。これは死ぬ前の肉体的な痛みのひとつのイメージです。死に際して精神的な痛みのイメージもあります。私たちはこの世の多くの人や物を愛し、それらに深く執着しています。死ぬということは、それらを全てあきらめ、身近な愛する全てのものから離れざるを得ないことを意味します。このことが精神的な苦痛を引き起こすのです。

どうして死は恐ろしいのでしょうか？　それは「未知」という恐怖です。死んだら何が起こるのか、どうなるのか分からない、という恐怖です。私たちにはその経験の記憶がありませんから。さらに、自分の存在がなくなる、という考えも、痛みや恐れの原因です。これらは死のネガティブなイメージです。その源は執着です。自分の身体、心、人々、友など、この世のものへの執着です。

**なぜ死ぬのか**

基本的な疑問が残ります。なぜ死ななければならないのでしょうか？（笑い）　答えは、いかなる化合物もいずれは分解される、ということです。それは自然の摂理です。五つの重要な要素とは、土、水、火、空気、エーテルのことです。私たちの身体もそうですが、それらの要素から生じ、構成されたものは、やがては分解されます。これは単純な論理です。ピラミッド、タージマハール、万里の長城、ヒマラヤやエヴェレストでさえ、さらには太陽や月までも、全ては時間の経過とともに崩壊するでしょう。全ての瞬間において、私たちの体細胞は成長し、死滅しています。若い頃は新しい細胞が作られる割合が大きいですが、歳をとるにつれて、古い細胞が新しい細胞に生まれ変わりにくくなります。これが歯、目、耳のトラブル、肌のしわ、白髪の原因ですし、病気に対する抵抗力も衰えます。これらは全て、分解の現象なのです。

**逃げ道はない**

私たちは死から逃れることはできるでしょうか？　中央アジアの現イラクの国に古い物語があります。その頃、イスラムの皇帝がいました。皇帝にはお気に入りの召使いがいました。その召使が庭を歩いていると、目の前に黒い影が立っていたので「あなたは誰ですか」と尋ねました。

その存在は答えました。「私は死の代理人です」

「ここではどんな仕事をなさっているのですか」と召使いは尋ねました。

「私はあなたを連れていくために来ました」とその影は穏やかに言いました。

　これを聞くや召使いは庭から飛び出して主人のもとへ走っていき、「旦那さま、旦那さま」と泣きついて、庭にいる黒い影が自分を一緒に連れて行くと言っていることを話しました。

皇帝は言いました、「おお、それでは急いで馬小屋に行って一番の駿馬に乗り、ここから逃げなさい」。　召使いは言われた通りにして、100キロほど離れた別の町へと急ぎました。馬で駆けてきたことと恐怖で疲れ果てたところで、休憩所を見つけたのでそこで休もうと思いました。しかし部屋に入ると、先ほどと同じ黒い影が彼を待っていました。「おや、ここにおられるとは！」と召使いは恐怖で息が止まりそうになりました。「庭に置き去りにしたはずなのに」

　「はい、私たちはまさにこの部屋で会うように運命づけられていました」と影は言いました。「先ほどは、あなたが皇帝の庭にまだいるのが分かってとても驚きましたよ」

つまり、私たちは死の王から逃れることはできないのです。召使いは自分の終焉を迎えるのに決められた場所と時間にたどり着くために、駆けたにすぎませんでした。

死の準備については、また別の機会にお話しすることにして、次回は、病気、エゴ、苦しみなどについてお話しします。